

# 松波むかし語り

ここに生き続けて

その30

今回のお客様

松波子ども会の結成に携わった

せんすい

はるえ

泉水 春江さん 84歳 4丁目

“自分の子もよその子も同じ、  
みんなかわいいです！”



「泉水」という名字は市原市に多いそうで、泉水さん自身も市原市潤井戸（うるいど）の出身です。戦後まもなく、小・中学校兼務の養護教諭として勤務、始まったばかりの学校給食で奮闘しました。「アメリカ産の脱脂粉乳をお湯で溶いてミルクにし、あとは具だくさんのみそ汁くらいなものでしたが、栄養不足の子どもをなくそうとがんばりました」。昭和26年、松波に越してきてやがて子どもが生まれ、弥生小でPTAの役員を決めることになりました。「私は、子どもが小さいから『できない』と断りに行ったのに、『最悪、引き受け手がない場合はお願いします』と言われて……」。結果は「最悪の場合」に命中、役員を引き受けたのが子どもたちとのつきあいの始まりでした。

でも、いったん役員を引き受けてしまうと、持ち前の行動力を発揮します。各地に子ども会が誕生し、となりの轟町にもできていたことから、松波でも子ども会をつくろうと昭和35年から話し合いを続けて、38年7月に結成にこぎつけました。区ごとの単位子ども会も発足、にぎやかな活動が始まります。「クリスマスや春休みのお楽しみ会、また夏休みの大東岬への旅行はバス8台を連ねて160名もの参加があったんです」。ただ子どもを楽しませるのでなく、キャンプなどは一人ひとりに役割を持たせるよう心掛けたといいます。

子ども会を機に、泉水さんはやがて弥生小 PTA 副会長、交通指導員、青少年相談員、轟中学校区子ども会連絡会会長、千葉市子ども会連絡会副会長、西部ブロック長、轟中学校区青少年育成委員会副会長・広報部長、千葉市社会体育指導員理事など、さまざまな役職を担ってきました。町会では婦人部長として、料理講習を通じて栄養士さんの指導を受けたりもしました。その後、昭和50年、「若竹婦人学級」を結成、轟公民館を借りて月2回の例会で絵手紙や読書会、健康教室（ハイキング）、料理教室（自分の健康は自分で守る）などを行ってきました。今は建て直した自宅の庭で野菜を栽培、市内平山町の息子さんの作る有機野菜と共に直売する毎日です。

泉水さんの指導を受けて育った子たちは、大きくなって「泉水さん！」と呼ぶそうです。「今会ってもかわいいです。だって、自分の子もよその子も、みんな同じ街の子ですもの」。この町の子どもたちは、みんな泉水さんの子どものようです。



昭和60年 高田青年の家一泊研修  
炊事当番も大事な役割



平成3年8月 神埼青年の家 幹部会員一泊研修  
朝の体操と朝食時の健康的な顔

